

令和 7 年度 全国学力・学習状況調査【質問紙調査】

羽島市の結果及び今後に向けた指導について

※紙面の都合上、小学校及び義務教育学校（前期課程）を小学校、中学校及び義務教育学校（後期課程）を中学校と表記している。

1 こどもたち自身のことについて

○中学校において、「自分にはよいところがある」と回答した生徒の割合が増加している。小学 6 年生時（令和 4 年度）と比べても大きく増加しており、自己肯定感を醸成する指導を継続した成果だと考える。

○中学校において、「将来の夢や希望をもっている」と回答した生徒の割合が増加している。職業講話や職場体験等の体験的な活動を含めたキャリア教育の成果だと考える。

△小学校において、「自分にはよいところがある」と考える児童の割合が減少している。

△「いじめはどんな理由があってもいけない」と考える児童生徒は多いが、全員ではない。

【今後に向けて】

- ・お互いのよさや活動の価値を認め合うような場を意図的に設けるなど、自己肯定感の醸成につながるような活動を、小学校段階から積極的に行うようにする。
- ・3 か月に一度のいじめの防止等を推進する週間を生かし、児童生徒がいじめと向き合う機会を設けるとともに、「いじめを許さないこと」を前提とした指導を継続する。

2 学校の学習での ICT 機器の活用について

○ICT 機器の活用頻度は、小学校、中学校ともに全国平均を大きく上回っており、各学校で活発に活用されていることが分かる。

△「ICT 機器が勉強の役に立つ」と回答した児童生徒の割合は減少している。

【今後に向けて】

- ・教職員が ICT の活用スキルを高めるとともに、ICT の効果的な活用方法について、児童生徒や家庭と共有を図るようにする。
- ・実物に触れることができない場合で ICT を活用するなど、意図的な ICT の活用を視点とした授業改善を試みる。

3 学校生活とのかかわりについて

○小学校において「学校に行くのが楽しい」と回答した児童の割合が増加した。また、中学校において「自分と違う意見について考えるのは楽しい」と回答した生徒の割合が小学 6 年生時と比べて大きく増加した。授業や行事等において、児童生徒どうしが対話的・協働的にかかわる場面が増え、そのことが有意に働いた結果だと考える。

△「友達関係に満足している」と回答した児童生徒の割合について、伸びはみられない。

【今後に向けて】

- ・ソーシャルスキルトレーニングを行ったり、他学年の仲間や地域の方とかかわる機会を増やしたりするなど、人とかかわり方を学ぶ機会を設ける。
- ・多様な価値観に触れたり受容したりすることができるように、道徳教育や人権教育などを通じた啓発を進める。

4 こどもたちと地域や家庭生活とのかかわりについて

○中学校において「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」と回答した生徒の割合が小学 6 年生時よりも大幅に増加した。コミュニティ・スクールによる地域人材の活用が活発になり、地域とかかわる機会が増加したことが要因と考える。

△全国と比較すると、上記のように回答した児童生徒の割合は平均を下回っている。

【今後に向けて】

- ・地域、家庭、学校が連携を図り、児童生徒の地域や社会とかかわりが増えるような方向性を共に考えるようにする。
- ・地域を含めた学校内外の多様な人材を生かした教育課程を編成し、児童生徒とのつながりの強化に努める。

令和 7 年度【国語】

■小学校及び義務教育学校（前期課程）

◎全国の平均正答率との比較より

- ・羽島市の全問題に対する平均正答率は、全国平均を下回っている。
- ・「話すこと・聞くこと」にかかわる設問は、他の設問よりも比較的正答率が高い。
- ・「文章の構成を考えることができるかどうか」をみる設問は、全国平均並み。
- ・「言葉の特徴や使い方」にかかわる設問に、特に弱さがみられる。
⇒漢字を文の中で正しく使う活動や指導の充実が必要である。
- ・「読むこと」にかかわる設問に課題がある。
⇒文章全体の構成を捉えて要旨を把握する指導や、目的に応じて文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つける指導の充実が必要である。

■中学校及び義務教育学校（後期課程）

◎全国の平均正答率との比較より

- ・羽島市の全問題に対する平均正答率は、全国平均をやや下回っている。
- ・「言葉の特徴や使い方」にかかわる設問は、他の設問よりも比較的正答率が高い。
- ・「根拠を明確にして書くことができるかどうか」をみる設問は全国平均より高い。
- ・「事象や行為を表す語彙について理解しているかどうか」をみる設問は、全国平均と同程度である。
- ・「読むこと」にかかわる設問に課題がある。
⇒表現の効果や、登場人物の設定の仕方を捉えるような学習活動や指導の充実が必要である。
- ・「読み手の立場に立って、表記を確かめて、文章を整えることができるかどうか」をみる設問に、特に弱さがみられる。
⇒文章を見直し、誤りを見つけたり整理したりする学習活動や指導の充実が必要である。
- ・「目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができるかどうか」をみる設問に弱さがみられる。
⇒目的を正しく説明した文章を選んだり、書いたりする学習活動や指導の充実が必要である。

■指導の方針

小学校及び義務教育学校（前期課程）

質問紙調査では「国語の授業の内容はよく分かる」と回答した児童が 8 割近くいる一方で、学力調査の平均正答率が全国を下回っています。特に、「読むこと」について課題がみられました。

年間の指導計画を工夫することで「読むこと」に関する学習の充実を図る、国語を専門とする教職員が主体となり「読むこと」に関する指導を充実させる、読書など文章を読む活動を啓発することで多くの文章に触れる機会を意図的に設ける、などの工夫が必要だと考えます。

中学校及び義務教育学校（後期課程）

「根拠を明確にして書くこと」について、平均正答率が全国平均を上回っています。一方で、「読むこと」に加えて、表記を確かめて正しい漢字を使うなど「文章を整えること」に課題がみられました。

教科担任が「読むこと」に関する学習活動の充実を図ったり、誤りがある文章を校正するような学習活動を仕組んだりすること。「読書が好き」と回答した生徒の割合が全国平均を上回っていることを踏まえ、様々なジャンルの本を読むように啓発することなどが必要だと考えます。

令和7年度【算数・数学】

■小学校及び義務教育学校（前期課程）

◎全国の平均正答率との比較より

- ・羽島市の全問題に対する平均正答率は、全国平均を下回っている。
- ・「角の大きさ」にかかわる設問は、他の設問よりも比較的正答率が高い。
- ・「測定領域」に、特に弱さがみられる。また、「変化と関係領域」にも課題がある。特に、「問題解決に必要な数量を見いだし、求め方を式や言葉を用いて記述することができるかどうか」をみる設問に対するポイントが低い。
⇒複数の数量からともなって変わる二つの数量の関係を見いだしたり、問題を解決するために必要な数量を明らかにしたりする、求め方を式や言葉で表して記述したり説明したりする、などといった学習活動の充実が必要である。
- ・「数と計算領域」にかかわる設問に課題がある。
⇒分数どうしの計算に取り組む時間の拡充や、必要な情報を選び計算する場面を意図的に仕組むような指導の工夫が必要である。

■中学校及び義務教育学校（後期課程）

◎全国の平均正答率との比較より

- ・羽島市の全問題に対する平均正答率は、全国平均を下回っている。
- ・「図形領域」にかかわる設問で、平均正答率がやや高い。
- ・「データの活用領域」にかかわる設問に課題がみられる。特に、不確実な事象の起こりやすさの傾向を捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することに弱さがある。
⇒相対度数などの数学の用語の意味理解を進めるための指導や、それらを用いて傾向を説明するような学習活動を充実させる必要がある。
- ・「反例をあげることができるかどうか」をみる設問に課題がある。
⇒問題に対する計算や説明を求めるだけでなく、その反例をあげるような学習活動を仕組むなど、指導の工夫が必要である。

■指導の方針

小学校及び義務教育学校（前期課程）

質問紙調査では、9割以上の児童が「算数の学習は、社会に出たときに役に立つ」と回答しています。一方で、「算数の勉強が好き」「あきらめずにいろいろな解き方を考える」と回答した割合は全国平均を下回っており、「測定領域」と「変化と関係領域」にも課題がみられました。

このことから、ともなって変わる二つの数量の関係を明らかにしたり、そこから分かることを見いだしたりする活動を充実させるとともに、問題解決に向けた考え方などを共有し、その楽しさや算数のよさを十分に味わえるような指導や振り返りの仕方の工夫などを行うことが大切だと考えます。

中学校及び義務教育学校（後期課程）

質問紙調査では「数学の勉強が好き」と回答した生徒の割合は、全国、県の平均をともに上回っており、数学を学ぶことを肯定的に捉える生徒の割合が高いことが分かりました。一方、学力調査では、「図形領域」で全国平均を上回ったものの、「データの活用領域」に課題がみられました。

このことから、特に「データの活用領域」で、単元を通して、数学的な根拠に基づいて過程や結果を説明したり、説明の根拠としなかった理由をあえて問うたりする、飛躍や曖昧さがないように表現できているかを確認め合うようにする、などといった筋道立てて説明する活動の工夫が必要だと考えます。

令和 7 年度【理科】

■小学校及び義務教育学校（前期課程）

◎全国の平均正答率との比較より

- ・羽島市の全問題に対する平均正答率は、全国平均を下回っている。
- ・『生命』を柱とする領域」に、特に弱さがみられる。中でも、「花のつくりや受粉についての知識が身に付いているか」をみる設問に課題がある。
⇒植物等の知識を身に付ける上で、年間を通した飼育・栽培活動が有効である。
- ・「実験の条件を制御した方法を発想し、表現することができるか」をみる設問に課題がある。
⇒実験の条件を制御した方法の発想や技能を身に付ける上では、実験の立案、結果を予想した上での実験、実物の観察や事実に基づく考察を大切にしたい指導が必要である。
- ・「水の結露について、概念的に理解しているかどうか」をみる設問に課題がある。
⇒水の結露など目に見えない事象の概念的な理解には、モデルを用いた説明活動が有効になる。教師や児童がモデルを用いて説明したり考察したりする場を設けるなどの工夫が必要である。

■中学校及び義務教育学校（後期課程）

◎全国の平均 IRT スコアおよび平均正答率との比較より

※本項における平均正答率とは、対象生徒数が 200 を超える設問の平均正答率のことを指すものとする

- ・羽島市の平均 IRT スコアは、全国平均を上回っている。
- ・『粒子』を柱とする領域」の平均正答率が高い。特に、「身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定できるかどうか」をみる設問の平均正答率が高い。
- ・「知識及び技能を関連付けて、地層の重なり方や広がり方を推定できるかどうか」をみる設問に課題がみられる。
⇒実際に見ることが難しい内容だからこそ、スケールの大きさを考えたり、推察したりする活動の充実など、指導の工夫が必要である。
- ・「結果を予想することができるかどうか」をみる設問に課題がある。
⇒実験の立案、事実に基づく考察等の指導を繰り返し行うことが必要である。

■指導の方針

小学校及び義務教育学校（前期課程）

全問題に対する平均正答率が全国平均を下回っています。特に、観察や実験にかかわる設問に課題がみられ、「観察や実験をよく行っている」と回答した児童の割合も全国平均を下回っています。

このことから、理科の授業における観察や実験の機会を増やしたり、児童が事実や結果に基づいて考察したりするような学習活動の充実が必要になると考えます。また、ICT を用いた学習が充実してきているからこそ、実物を見たり触ったりする経験ができる場を、これまで以上に意図的に設定することが大切です。

中学校及び義務教育学校（後期課程）

学力調査の平均 IRT スコアが全国平均を上回っており、質問紙調査では約 7 割の生徒が「理科の勉強が好き」と回答しています。一方、目に見えない事象の推定や、結果の予想について課題がみられました。

このことから、実験の立案、結果を予想した上での実験、実物の観察や事実に基づく考察などの学習活動を一層充実させることや、仮説や推察をもとに観察や実験を繰り返しながら事実を明らかにしていくような活動の工夫が必要だと考えます。